

在外研修報告

1995年11月5日から1996年1月25日までエジプト・トルコ・ギリシャに出張し、古代の117遺跡を実見した。以下、現地で考えたことを記す。

(1) 古代エジプトのピラミッドの群としての分布と、畿内の前方後円墳の群としての分布との比較

エジプト第1～3王朝の王墓や最初のピラミッド（ジュセル王）がサッカーラに集中し、首都メンフィスに近接する。これは、日本の大倭古墳群や最初の大前方後円墳（箸墓）が首都纏向に近接するのと似る。また、エジプト4王朝の諸王のピラミッドは、首都メンフィスより遠く離れた場所に位置し、この時代のピラミッドが最も大きい。日本の古市古墳群・百舌鳥古墳群に、4王朝のピラミッド群の配置が似る。エジプトの場合、個々のピラミッドの王名が判明しており、その点が日本の前方後円墳より分析しやすい。エジプト古王朝において3・4・5・6王朝と区分する王朝細分の本質的な相違点や王相互の血縁関係などを検討することは、畿内の大前方後円墳の群配置を考える上でも有効であろう。

(2) 古代トルコにあらわれる整然とした計画による都市造りと、その先行形態

かつてミレトス遺跡は、日本古代における方格地割をもつ都城と比較されたことがある。そして「ヒッポダモス式都市は植民都市であって、在地における生活の伝統と断絶し、外来の植民市民を主体として建設された」と把握された（田辺・稲田「エーゲ・オリエント・日本の都市」『考古学研究』77, 1973）。しかし、トルコやギリシャでは、ヒッポダモス式都市とは、Hippodamus (B.C. 5) が考案した都市計画による都市を指すのであり、ミレトスでは紀元前5世紀、プリエネでは紀元前4世紀に計画・実施されている。ミレトスの最初の植民地への移行はB.C.15世紀頃のミケーネ人の移住であり、プリエネでは、最初の植民都市は位置が判明せずペルシャ戦争後B.C.359年に再建されたのが現在のプリエネ遺跡であることが判明している。したがって、植民都市であるからヒッポダモス式都市であると断ずることはできず、むしろ、ミレトス・プリエネ遺跡に先行する時代のトルコ・ギリシャにおける建物配置の規則性を検討する必要がある。ミケーネの城塞やヒッタイトの都城ボガスキョイにおいては、自然地形を利用して建物を建て、方格に配置する規則性は認められないが、ティリンスの城塞では同一方向に近い建物群が出現し、B.C.13世紀のピュロスにおいては、内庭を囲む連続した建物の配置という点では古式であるが、同一方向に建物を配置する傾向が強くなる。次にB.C.8世紀のトルコ・フリギヤ王国の首都ゴルディオンでは、「広間」と「玄関の間」からなるメガロン群が、同一方向に規則的に並ぶ。したがって、ギリシャの暗黒時代（B.C.12～8）と呼ばれる時期を前後する時期にはじまり、Hippodamusが都市計画案を完成させるまでのB.C.5世紀までの建物配置及び道路の規則性についての検討が必要となる。この点は、今後の課題としたい。

(3) クレタ文明における宮殿と呼ばれる遺跡

クレタ文明において宮殿とされるものがいくつかある。このうちマリア、グールニア、カトー・ザクロは海に面し、王の部屋とされるものは、いずれも7×7m、7×10mと狭く、遺構全体の中でも標高の低い位置にある。一般の居住地が標高の高い位置にあって、王の部屋と連続していることなどからみて、王という概念を用いることは、検討の余地があると思う。クノッソスでも玉座の間は、12×10m程度であり、ファイストスやアギア・トリアダでも、それ以下の狭さである。以上からみると海に面した三遺跡は海の町で、王の部屋はリーダーの部屋とでも呼ぶべきであろう。一方、やや陸地に入る三遺跡では、倉庫群が遺跡の面積のかなりの部分を占めることが注目される。ミケーネ文明は、遺跡からみて強い王権の存在が推定できるが、それに先行するクレタ文明の社会組織のあり方は、古典ギリシャの民主政のあり方とも関連して興味深いものがある。

(山崎信二)